

カチンの森事件に関する一考察

－真相解明の過程における関係諸国の動向を中心にして－

著者	岡野詩子Okano, Utako
所属	京都外国語大学外国語学部英米語学科 4年
アイテムタイプ	論文 (Forum Poland Online Database: FPOD)
URL	http://www.polinforjp.com/kansai/okano04.pdf
発行年月日	2004年
Copyright by	Okano, Utako
初出	京都外国語大学外国語学部英米語学科卒業論文

I はじめに

第二次世界大戦でポーランド国民は多大な犠牲を強いられた。犠牲者の数は600万人を超えた。重軽傷者を含むと、2000万人以上の人々が戦争の被害を受けたと言われる。当時のポーランド全人口3000万人余りの中で、5人に1人が死亡し、3人に2人が被害を受けた。この中には270万人のユダヤ系ポーランド人が含まれている。戦前のユダヤ人人口は330万人であった。つまり死を免れたユダヤ人はわずかに60万人ということになる。ユダヤ系ポーランド人を含めて、ポーランド国民はまさに絶滅の淵に立たされていたのだ。

戦争中に起きた事件の中で、アウシュヴィッツはよく知られているが、カチンの森事件はほとんど知られてはいない。真相が解明され、関係国が罪を認めるまで約半世紀以上かかった異例の事件である。この事件で4000人余りのポーランド国民である同国将校たちが犠牲者となった。しかも、事件の真相は調査の上で解明されているにもかかわらず、偽りの内容が長年結論づけられており、ポーランドやドイツはそれぞれの立場上、事件の全事実を目をつぶらざるをえなかった。ソ連によって嘘の歴史が作られたのであった。私は、なぜこのような事件が起きたのか、そしてなぜ真相究明にそこまで時間がかかったのかに興味を持った。

しかし、時代の変化に伴い、徐々に事実が明らかにされていった。そして、ロシアもソ連時代の歴史を都合に合わせて書き直さず、直視しようという動きが進んでいる。

カチンの森事件は、冷戦の中で長く謎とされてきた。ソ連崩壊後、極秘とされてきた文書から、ついに真相が明らかとなった。ポーランドとロシア関係のしこりとなっていたカチンの森事件の悲劇とはどんなものであったのか、この事件に関わった関係諸国の動向や当時の国際情勢、そして、それぞれの国が現在、事件についてどう考え、どのような行動を起こしているのかを述べていきたいと思う。

II カチンの森事件とは

1939年9月1日、ナチス率いるドイツ軍がポーランドに侵攻したことで、第二次世界大戦（巻末資料3「第二次世界大戦中のポーランド」参照…省略）が始まった。そして、17日にソ連が独ソ不可侵条約に基づいてポーランド東部に侵攻し、ポーランドはドイツとソ連に分割占領されることになった（巻末資料1「1939年の独ソ不可侵条約による領土分割」参照…省略）。ソ連軍はポーランド東部を制圧するとすぐにソ連占領下のポーランド軍を解体し、その将校全員を捕虜として拘束した。その後、ポーランド軍将校たちは1940年の夏までにスモレンスク周辺の3つの収容所（巻末資料2「カチンの森の位置」参照…省略）に収容されたが、近郊のカチンの森やその他の地域でほとんど全員が射殺されそのままの姿で埋められたのだった。ナチスはこの大量処刑の情報を入手し、当時まだドイツの占領下にあったカチンの森の遺体埋葬現場を発掘したところ、約4000人のポーランド軍将校の遺体が横たわっていた。

1943年4月13日、ドイツのゲッベルス宣伝相（Joseph Paul Goebbels, 1897-1945）はドイツのラジオ放送を通して、スモレンスク郊外のカチンの森でソ連当局によって1940年春から夏に殺害されたとされる数千人のポーランド軍将校たちの遺体を発見したと発表した。全ての将校が頭部をピストルで撃ち抜かれており、そのままの姿で埋められていた。ソ連側はこのドイツの発表に直ちに反論し、ナチスがこの大量処刑を行ったと主張した。ポーランド政府は消えた将校たちの消息を何度も尋ねたが、ソ連政府は十分な回答をしなかった。そこで、ポーランド政府はスイスの国際赤十字にこの事件の調査依頼をしたが、国際赤十字はソ連の同意があれば依頼を受けると答えた。しかし、このポーランド政府の行動はソ連に対する敵対行為とみなされ、ソ連はポーランドとの国交を断絶した。1941年7月30日のポーランド＝ソ連協定で持ち直したポーランドとソ連の外交関係は、カチンの森事件によって再び破綻した。

1945年に第二次世界大戦が終結し、ドイツが敗戦国となり、ポーランドは共産化した。これによって、ポーランドは実質上ソ連の支配下に組み込まれた。ポーランドと同様にソ連圏の一国となった東ドイツ及び、ナチス時代を全否定することによって再出発した西ドイツもカチンの森事件の真相究明をソ連に言い出せず、歴史上のタブーとなった。カチンの森事件はドイツの犯行と長年言い続けられるのであった。

III 当時のポーランドを取り巻く国際情勢

1. ポーランド・ソ連関係

独ソ不可侵条約の中にあつた秘密議定書によって、ポーランドはモロトフ＝リッベントロップ線（Vyacheslav Mikhailovich Molotov, 1890-1986; Joachim von Ribbentrop, 1893-1946）で東西に分割された。ポ

ーランド東部はソ連によって占領された。1940年2月から1941年6月までの間に約150万人のポーランド人がソ連の奥地に強制的に移送され、強制労働を強いられた。これは、ソ連占領地域においてポーランド指導権を排除するためであった。公式にはポーランドとソ連は戦争状態であった。イギリスとフランスはドイツに続くソ連のポーランドへの侵攻を止めようとはしなかった。それは、対独戦争においてソ連が味方になる可能性を考慮したからであった。これに対して、ポーランド政府は戦前領土の回復という目的を堅持し、こうしたイギリスとフランスの動きを厳しく見ていた。それは、亡命政治家においても国内の抵抗運動においても一般的な態度であった(伊東 [1988], p.165)。

シコルスキ (Władysław Sikorski 1881-1943) はソ連に対して好意的だった。彼は亡くなるまでポーランドとソ連の国交正常化に向けて力を尽くした。1941年6月21日に独ソ戦が勃発した。

この事実はポーランド亡命政府の政治的立場を極めて困難なものとした。シコルスキはイギリス政府の強力な後押しの下に領土問題を挙げ、いち早くソ連との国交の回復を主張した。これに対して、ザレスキ (August Zaleski, 1883-1972)、ソスニコフスキ (Kazimierz Sosnkowski, 1885-1969)、セイダ (Marian Seyda, 1879-1967) らは独ソ二敵論を唱え、いっさいの妥協を拒んだ。当時の大統領ラチキエヴィチ (Władysław Raczkiewicz, 1885-1947) も反対派を支持した。

1941年7月30日に反対派閣僚の一斉辞任によって、ソ連＝ポーランド協定が調印された。これによって、ロンドンのポーランド亡命政府とソ連の外交関係の復活、ソ連の作戦におけるポーランド軍の創設、ソ連領で自由を奪われたままになっているポーランド人全員に恩赦を与えることにソ連側は同意した。

さらに、同年8月14日、シコルスキはポーランド＝ソ連軍事協定に調印した。この協定では、ポーランド軍を即座にソ連で創設すること、同軍は主権国家ポーランドの軍隊の一部となること、ソ連駐留のポーランド兵は俸給、食糧、扶養を赤軍兵士と同様に受けることなどが取り決められた。ポーランド政府は、ソ連に抑留されている大量のポーランド人の解放と保護に全力を尽くした。そして、ポーランド＝ソ連軍事協定にならってポーランド軍を再編成した。しかし、アンデルス将軍 (Władysław Anders, 1892-1970) のもとに出頭してきた将校の人数は極端に少なかったのである。

シコルスキが直接スターリン (Iosif Vissarionovich Stalin, 1879-1953) に将校たちの行方を尋ねても、確かな返事を得ることができなかった。スターリンはそれ以上その問題に触れることを拒んだのである。以上が、カチンの森事件の発端となる出来事である。

2. ポーランド・ドイツ関係

ナチス・ドイツはポーランド内で「虐待されている」少数民族であるドイツ系住民の保護をあげた。しかし、虐待の事実はなく、ナチス・ドイツが東方に自分たちの「生活圏」(レーベンスラウム)を確保したかったのだ(渡辺 [1991] p.4)。そして、1939年9月1日にドイツはポーランドを攻撃し始めた。ポーラ

ンド軍は主力軍を国境沿いに配置し、防衛につとめた。しかし、最初の防衛線は9月3日までに崩れた。そして、勝敗は一週間で決まり、9月27日にワルシャワは陥落した。

ポーランドはイギリスやフランスからの援助を期待した。しかし、ドイツに宣戦布告をしたにもかかわらず、実際に援助を受けることはなかった。ヒトラー (Adolf・Hitler, 1889-1945) は9月28日に、ポーランドは国家としては存在しないと発言し、モロトフも同様の宣言をした。

ポーランドの領土は独ソ不可侵条約に基づきドイツとソ連によって分割された。ドイツの占領地域はポーランド人口の約61.6%であった。ドイツ人の厳重な監督の下でポーランド警察が機能した。ナチス・ドイツの支配下で、ポーランド人はかろうじて支配民族のための労働力として生き残ることを許された。ドイツ側はポーランド人を独立の文化的存在としては計画的に抹殺しようとしていた。なぜなら、ポーランド人はドイツ人より劣等民族という考え方があったからだ。これはまさにポーランド民族の生存の危機にほかならなかった。ドイツの占領政策は、編入地域をゲルマン化し総督府を植民地として経済的に搾取することを目的としていた。人類史に比較をみない非人道的なものであった。ポーランド人の精神的・文化的指導層を文字通り物理的に抹殺し、残りの人口は教育水準を低く抑え、かろうじて食うや食わずの状態にとどめてドイツ人のために働かせるという政策がとられた(伊東 [1988], pp.160-161)。

1939年11月にはクラクフのヤゲウォ大学の全教官が逮捕された。そして、戦争が終わるまでに、ポーランドの医師の45%、裁判官・弁護士57%、教師の15%、大学教授の40%、高級技師の50%、初級・中級技師の30%、聖職者の18%を失った(伊東 [1988], pp.160-161)。

中等以上の教育施設は閉鎖されるか解体され、図書館や公文館は閉鎖された。編入地域ではポーランド語を話すことさえ許されなかった。

戦争が終わるまで、ドイツ人入植者を入れるために248万人にのぼるポーランド人が先祖伝来の土地や家屋を奪われ追い立てられた。また、246万人にのぼるポーランド人が無差別に徴発され、ドイツ内奥の工場に送られて重労働に従事させられた。多くの徴発労働者は悪条件のため死亡した。少しでも規則を破ったり、抵抗の意思を示した者は、即決裁判によって見せしめのため街頭で処刑された(伊東 [1988], pp.160-162)。

しかし、9月でドイツに敗れたとはいえ、ポーランド政府と国民は決して降伏しなかった。ポーランド大統領と政府はルーマニアに逃れたが、当時ルーマニアもドイツの圧力を受けていたので、ルーマニア政府によって拘束された。ポーランド国外に逃れたポーランド有力政治家の間で、亡命政府を形成する動きが起こった。シコルスキとチャーチル (Winston Churchill, 1874-1965) の尽力によって亡命政府と国民会議は、1939年11月にフランスのパリからイギリスのロンドンへと移った。

ドイツ占領下でも、ポーランド国民はドイツに協力しようとする勢力は現れなかった。そして、戦争の最中に地下組織が誕生した。ロンドン亡命政府は、この最大の武装地下勢力を統御するとともに国内を地下国家として統治していた(山本・井内 [1980], pp.182-183)。

3. ソ連・ドイツ関係

1939年8月23日、ドイツとソ連は独ソ不可侵条約を交わした。それまで相互に非難し合っていたヒトラーとスターリンが手を組んだことに、世界各国にとっては衝撃的なことであった。この条約は、次に述べるような点でソ連とドイツ両国を拘束するものであった。「1. 相手国に対し、単独でまたは他国と共同して、いかなる侵略行為にでることも、いかなる攻撃を加えることをもしない。2. 相手国のいかなる交戦敵国に対しても援助を与えない。3. 相手国に敵対的な集団には、たとえ間接的にも参加しない」(フレミング [1966], p.195)。さらに、この条約の裏に東欧・バルト諸国一帯を独ソで二分割するという秘密議定書がヒトラーとスターリンによって交わされていた。

その中のポーランドの領土の取り決めは次のとおりである。「ポーランドの領土的・政治的再編については、ナレフ・ヴィスワ・サンの河川をドイツとソ連との勢力圏の境とする」(ミコワイチク [2001], p.18)。ヒトラーは、ソ連と不可侵条約を結ぶことでポーランドを征服することに際し、ソ連が介入する可能性を排除したのである。そして、調印から8日後の1939年9月1日にドイツはポーランドに攻め込み、占領し、領土をソ連と分け合った。

1940年夏、ドイツはルーマニアを自己の勢力圏にしようとした。スターリンは勢力圏に定めていなかったバルカン諸国へのドイツの進出に強い危機感を覚え、ドイツに対し不快感を表明した。モロトフとヒトラーとの会談で、モロトフはドイツ軍のフィンランドの撤退、ソ連とブルガリアの相互援助条約の締結、ボスポラス、ダーダネルス両海峡への拠点の設置を求めた。しかし、ヒトラーはこれらの要求を受け入れなかった。これによって、両国間の対立点を解消するどころか、利害の相違を際立たせたのだった。

1941年1月、ドイツがルーマニアに軍隊を送ったことから、両国の関係はいっそう緊張を増した。そして、3月にドイツはブルガリアにも軍隊を送った。4月にソ連とユーゴスラビアとの間に友好不可侵条約を締結したときにソ連とドイツの関係の不和はいっそう明確になった。ドイツはこの条約が公表された4月6日にユーゴスラビアを攻撃し始め、1週間で降伏させた。

1941年6月にドイツ軍はソ連に侵攻した。これによって独ソ不可侵条約は破棄された。フィンランド、ハンガリー、ルーマニア、イタリアがこの戦争に参加しことで、ソ連は簡単にドイツをしとめることができると考えたが、この戦争はドイツが勝った。ソ連はいずれ征服される運命にあるという見解が、ほとんどどこでも採られた。

1942年11月19日にスターリングラードでソ連軍は反攻を開始し、1943年2月初頭にドイツはソ連に敗れたのだった。これは、ドイツにとって大戦中に経験した最初の敗北であり、独ソ戦だけではなく第二次世界大戦全体の転機となった。

ドイツ軍をソ連領から追い出し、さらにベルリン進撃へと導いたのは1943年7月のクルスクの戦いであ

った。この戦いは史上最大の規模の戦車戦であった。ソ連はスターリングラード戦で自信を強めていたこともあって、数的にもドイツよりは優勢であり、勝敗は目に見えていた。この戦いの勝利の後、ソ連はドイツを完全に圧倒し、着実にベルリンへ進撃を始めたのであった。そして、1945年5月2日にソ連軍はベルリンを占領し、ナチス・ドイツは消滅した。

IV ドイツ犯行説とその根拠

1943年4月13日、ドイツのゲッベルス宣伝相はドイツのラジオ放送を通して、スモレンスク郊外のカチンの森でソ連当局によって1940年春から夏に殺害されたと思われる数千人のポーランド軍将校たちの遺体を発見したと発表した。

これに対して、ソ連側は4月15日に次のような声明を発表した。「この2、3日ゲッベルスは、ソ連当局がスモレンスク地方で1940年春にポーランド軍将校を大量に射殺したというでたらめを広めている。ドイツ・ファシストらはもっとも卑しむべき嘘をつき、すでに明らかのように、みずからの罪を隠すことにためらうことも知らない。ポーランド人捕虜は、1941年当時、スモレンスク地方に住む他の多くのソ連人とともに建設工事に従事していたのだが、この人々が、ソ連軍が同地から撤退した1941年夏に、ドイツ・ファシストらの毒牙にかかったのである。ドイツ・ファシストらの発表は、ポーランド人捕虜のこうした悲劇的な運命に関して、いささか疑いの余地を残すものではない。ゲッベルスの発言が、虚構と誹謗とにより、ヒトラー一派の血塗られた犯行を隠蔽することを狙っているのは間違いない。ヒトラー一派はソ連が1940年春にその残虐行為をおこなったと主張しているが、彼らはこう報じることでみずからの責任を転嫁しようとしているのである」（渡辺 [1991], pp.10-11）。これによって、ソ連とドイツは真っ向から対立することになったのだ。

そして4月18日、ソ連情報局は再び説明を行った。「ドイツ・ファシストの殺人者たちは、何万人という罪なき人々の血で染まった手をしている。占領した国々の人々を組織的に抹殺し、子供、女性、老人に対しても情け容赦がない。ポーランドだけでも数十万人を殺害している。彼らの卑しい嘘や中傷に騙される者はいないだろう。このむごさ極まりない捏造の中にゲシュタポのやり方を容易に見出すことができる。実際には、1941年、スモレンスクの西にはポーランド人捕虜がいたのである。ソ連軍がスモレンスクから撤退すると、捕虜は多くのソ連市民と共に、ドイツ・ファシストの餌食になったのであった。ドイツ軍にすぐに殺害された者もいれば、特別な機会のために生かされた者もいた。ドイツ・ファシストらは無防備の何千人という人々を射殺し、その死体にはゲシュタポの文書館にあった偽の文書を持たせ、ソ連の大地に埋葬した。埋葬場所としてグニョーズドヴォの古墳が使われたが、その存在についてドイツ・ファシストは何も語っていない」（ミコワイチク [2001], p.57）。ソ連は、カチンの森一帯をナチス・ドイツ軍から奪還するやいなや、自己の犯罪をナチス・ドイツの仕業に摩り替える一大キャンペー

ンを展開した。

ドイツは独自に調査を続けた。ドイツ当局は独立の国際委員会、ポーランド赤十字、ドイツ法医学委員会の3つの組織で現場を調査した。この調査で、将校たちは1940年3月から4月の間に殺害されたと報告した。この間のカチンの森一帯はソ連の占領地域であった。

カチンの森事件の全容は、それ以後語られることはなかった。ソ連はずっと黙秘をし、ドイツの犯行であると主張し続けた。関係諸国にとっても、それは暗黙の了解であった。

V 真相の解明

戦後、ポーランドはソ連の支配下に入った。1946年に、ドイツの戦争責任を裁くニュルンベルグ裁判が開かれた。一部、カチンの森事件が取り上げられたが、ドイツとソ連の主張は平行線をたどり、真相の解明までには至らなかった。そして、カチンの森事件は歴史上のタブーとなった。

ソ連支配下のポーランドから、そして敗戦国のドイツからは言い出すことができなかったのである。1985年3月にゴルバチョフ書記長（Mikhail Sergeevich Gorbachev, 1931- ）が就任したことで、国内改革に乗り出し、ペレストロイカが始まった。公的な真相解明が可能になったのは、言うまでもなく1989年以降だ。1990年4月にポーランドのヤルゼルスキ大統領（Wojciech Jaruzelski, 1923- ）がモスクワに赴いてソ連のゴルバチョフ大統領と会談したときに、ソ連側は初めて公式に事実を認めた。ソ連公文書館で発見された内務人民委員部捕虜抑留者総局作成の名簿や若干の関連文書をヤルゼルスキ大統領に渡したのである。

全容は次のようだ。1939年にポーランド東部を侵略後、赤軍は約25万人を捕虜とした。ポーランド人将校はロシアの三つの収容所（巻末資料2 参照…省略）に送られた。1939年11月から1940年春までの間に、コゼリスク収容所には4万5000人の将校などが、スタロベリスク収容所には3920人が、オスタシュコフ収容所には約6500人がいた。1941年7月30日に調印されたポーランド＝ソ連協定で、ソ連領にいるポーランド人全てに恩赦を与えるということであったが、解放されていないポーランド人が多数存在し行方がわからなくなっていた。そして、アンデルス将軍を筆頭にソ連領内でポーランド軍を創設する時に、出頭してくる将校の人数が極端に少なかったのである。約15000人の将校が行方不明であると判明した。ポーランド亡命政府は、行方不明の将校についてソ連当局に幾度も尋ねていたが、十分な回答は得られなかった。さらに、将校たちからポーランドにいる家族への音信は1940年3月に突然途絶えていた。シコルスキは1941年12月初旬、モスクワに赴き直接スターリンに問いを投げかけた。しかし、スターリンは「満州に逃亡した」と曖昧な返事しかしなかった。そして、それ以上この問題に触れることを拒んだ。こうした理由から、ポーランド亡命政府はソ連に対し懐疑の念を持ったのである。

ドイツ法医学委員会、12か国から成る国際委員会、ポーランド赤十字の3つの調査団が独自に事件の調

査を行った。3つの調査委員会は次のような点で、一致した結論を得た。「①死体を縛っていたヒモはソ連製である。②死体の中には突き刺した跡があるものがあるが、これはソ連の銃剣によるものである。③死体の多くからソ連の新聞が大量に見つかった。④死体に撃ち込まれた弾丸はドイツ製である」(渡辺, 1991, p.12)。上に挙げた4番目の点については、ドイツ側は即座にこの弾丸を1939年以前にポーランドやソ連に輸出していたことを立証した。一番重要な点は、この虐殺がいつ行われたかということである。1941年夏の終わり頃まで、カチンの森一帯はソ連の支配下にあった。事件の発覚が1943年4月であるから、虐殺が調査当時から20か月以上以前に行われていればソ連の犯行になり、それ以降であればドイツの犯行になる。3つの調査団は約3年前の1940年春頃に虐殺が行われたと結論づけた。つまり、ソ連の犯行であったということが判明したのである。その根拠は「亡くなった将校を埋めた場所の地層が特殊で、死体は実質ミイラ化していた。数ヶ月で特定困難な骨になるところが、書類や身分を証明する物とともに保存状態良好な死体となって残っていたのだ。日記、新聞、未投函の書簡により殺害の日時が特定された。こうした文書から、カチンの森の墓から発見された4143人は1940年5月に殺されたのだ」(ミコワイチク [2001], p.60)。この事件はKGB (ソ連秘密警察) の前身であるNKVD (ソ連内務人民委員部) のベリヤ (Lavrentij Pavlovich Berija, 1899-1953) がスターリンの命令で、幹部メルクーロフ (Vsevolod Nikolayevich Merkulov, ?-1953) 及びその部下たちに行わせた犯行であった。

では、なぜこの事件が起こったのだろうか。ソ連側もドイツ側もポーランドを支配する上で、ポーランド民族主義派の中核グループ、つまり将校が存在してほしくなかったのは事実である。事件が起こった当時は、ソ連としてはポーランド人将校たちを取り除く最初の間隙であった。一方、ドイツがポーランド指導者層を抹殺したがっていたことは、ドイツ軍のポーランド占領期間を通して理解することができる。ポーランドをナチスと2分割したソ連が、ポーランド支配のために邪魔になったポーランド軍や警察などの権力機関や抵抗運動の指導者を裁判もなしに物理的に抹殺した。当時ソ連にとって利用価値があると判断された者は生き残されたのだ。そして、これらの人々に共産主義教育を叩き込み、戦後のポーランドの共産化に役立てたのである。

カチンの森事件の悲劇は、スターリン時代のソ連による組織的な犯罪であったが、戦後だいぶ経ってからポーランドに手渡されたソ連の極秘資料は、これを確認しただけではなく、ナチスによる暴露に対して国家ぐるみの事実すり替え、隠蔽作戦を行なったことを記していた。冷戦時代にはそれに基づいたプロパガンダ外交を展開し、結局時代の流れの変化の中でそれが破綻していった過程をさらけ出したのだ (外交フォーラム [1997b], p.66)。

VI 真相解明後の処理

1. ポーランドの立場

戦後のポーランドはソ連の支配下にあったため、ポーランド人にとってカチンの事件を口にするのはタブーであった。しかし、時代は移り変わり、ソ連ではゴルバチョフがペレストロイカの流れとなり、ソ連共産権の土台を揺さぶり始めた。その中でポーランドとソ連の関係も複雑に変化した。ポーランド人の心の中にあったカチンの森事件に対するソ連への不満、不信が徐々に表面化し、ヤルゼルスキ政権もソ連政府に対し、より具体的な形で真相の究明を求めざるを得なくなったのだ。

1995年6月にカチン虐殺55周年忌追悼行事が行われた。ワレサ大統領（Lech Wałęsa, 1943-）はエリツィン大統領（Boris Nikolaevich El'tsyn, 1931-）に行事への参加を招請したが、エリツィン大統領に代わりフィラトフ大統領府長官（Sergei Aleksandrovich Filatov, 1936-）が出席した。これは、いたくポーランド人を失望させた。ワレサ大統領は追悼演説の中で「2万人のポーランド人が何ら取り調べもなく、1940年3月5日に署名された一片の文書で銃殺されたが、これはスターリン、モロトフ、ミコヤン（Anastas Ivanovich Mikoyan, 1895-1978）などのソ連最高指導者の承認の下で行われた」（外交フォーラム [1997b], p.66）ということ強調しつつ、将来に向けて両国民の和解を呼びかけた。さらに、エリツィン大統領のメッセージとして「カチン記念式典は全体主義体制下で数十年にわたる嘘と沈黙を打ち破り真実が勝利した証左である」（外交フォーラム [1997b], p.66）と確認はしたのだが、ポーランドでは「ソ連からの謝罪はなかった」と不満をつのらせた。

1996年11月にチモシェヴィッチ・ポーランド首相（Włodzimierz Cimoszewicz, 1950-）は、ロシアを訪問した際、ポーランドのかねてからの念願であるカチンの森事件の虐殺現場にポーランド人犠牲者の墓標を立てることが遅れていることを取り上げ、必要経費はポーランド側で負担する用意があると申し出で、その促進に努めている（外交フォーラム [1997b], p.68）。

カチンの森事件の悲劇からすでに半世紀以上過ぎたが、この事件は未だ最終的に決着していないと考えているポーランド人は少なくない。

2. ソ連の立場

1987年4月に、ヤルゼルスキ大統領がソ連を訪問した。その中で、ゴルバチョフ書記長は「両国関係の歴史の中に事実の捏造や隠殺、いわゆる『空白』があってはならない。」と述べて、関係の改善を約束した。そこで両国関係史を見直す「合同歴史家委員会」が生まれた。見直しの対象は、1917年から1945年が中心で、(1) 1917から21年ソ連の二月革命とポーランド共和国の成立、(2) 1938年のスターリンに

よるポーランド共産党の強制解体、(3) 第二次世界大戦でのソ連軍のポーランド侵攻、(4) 1939から42年にかけてのソ連軍によるポーランド人の強制移送、(5) ナチスに対する行動戦線、(6) 1943年のワルシャワ蜂起である。このうちカチンの森事件は(4)に含まれている(世界週報 [1989], p.25)。

1988年7月、ゴルバチョフ書記長はポーランドを訪問し、ヤルゼルスキ大統領と会談をした。そして、共同声明が発表された。この声明は、「両国の対等な関係、主権、自主的な政策決定権の尊重を主張し、共に社会主義の刷新という共通の目標を示すが、その基礎となる国民性と歴史的な条件には大きな違いがあること認め、互いに『絶対的な真理』の主張はしないと述べている。ゴルバチョフ書記長の下でのソ連、ポーランド国民に向けて、いわゆる制限主権論を否定したものだ」(朝日新聞 [1988], 1988.07.15)。しかし、スターリン時代のポーランドとソ連とに関係する歴史の空白については、「専門家による真相究明の作業を早める」と声明で述べたにすぎなかった。多くのポーランド人はゴルバチョフ書記長からカチンの森事件に関する発言を期待していたが、具体的には出ず、ポーランド人を失望させた。

1993年8月にエリツィン大統領がロシアの大統領として初めてポーランドを公式訪問した。ワルシャワ市内の軍人墓地の中にあるカチンの慰霊碑を訪れ、ロシアの元首として初めて献花を行った。その慰霊碑には、ソ連時代の碑文として「カチンの土に眠るヒトラー・ナチズムの犠牲者ポーランドの兵士に捧ぐ」と記されていたが、書き換えられたのは言うまでもない。エリツィン大統領は「カチンの森犠牲者遺族の会」関係者と会談し、率直に許しを求めた。ソ連、そしてロシアがカチンの森事件の悲劇についてスターリン時代の非を認め、極秘資料を提供するという誠意を示した。このような形で過去の過ちを認め、ソ連時代に決して出すことができなかった極秘資料をポーランドに手交したゴルバチョフ、エリツィンの行動は評価されるべきであるとも思われる。

3. ドイツの立場

第二次世界大戦終結後の1945年11月20日からドイツのニュルンベルグで、第二次世界大戦での主要戦犯に対する国際軍事法廷が開かれた。このニュルンベルグ裁判は、非軍事化、非ナチ化、民主化、工場解体といった連合国による新生ドイツの指針の行く末を象徴したものであった。

これによって、ナチス部隊、突撃隊、親衛隊、治安警察、ゲシュタポなどのナチス党関係者が裁かれた。連合国軍が逮捕したナチス指導者戦犯は23人である。各被告は、絞首刑、終身禁固刑、有期禁固刑、無罪の判決を言い渡された。カチンの森事件も一部取り上げられたが、ドイツとソ連の主張は真っ向から対立し、平行線をたどった。ソ連側も究明をためらった。アメリカ側も真相の究明には乗り気ではなく、結局は何も解明されなかった。

実際はソ連の犯行だとわかっていたにもかかわらず真実がうやむやにされたのは、ニュルンベルグ裁判がナチス時代を全否定したものであり、もし連合国の主要な一員であったソ連の犯行と決めつけると、

ナチス時代を一部肯定することではないにしても、ナチスを裁く法廷で連合国の戦争責任が問われかねないことになってしまう。ナチス時代にナチスがやったとすることが、ニュルンベルグ裁判では都合が良かったのである。

真犯人であるソ連は公に罪を問われていない。ニュルンベルグ裁判では、連合国はソ連に対する宥和政策をはねつけることができなかった。そして、ドイツ自身もナチスに対する反省が深く、事実を消し去りたいと思っていた。ドイツ人は自らも過去のドイツの戦争犯罪の容疑者として裁いたのである。ドイツの反省によって、カチンの森事件は議論の対象にさえもならなかった。そして、ドイツ側からソ連の犯行だと告発することは困難であり、公式にはうしろめたさからできない状況にあった。ポーランドやドイツを含む世界の国々は、ソ連の仕業と分かっていたが、1990年にソ連が公式に事実を認めるまでドイツの犯行だとされていたのだ。

VII 現時点での事件に対する関係諸国の認識と課題（結論にかえて）

2002年1月16日と17日にロシアのプーチン大統領（Vladimir Vladimirovich Putin, 1950-）はポーランドを公式訪問した。8年ぶりのロシア大統領訪問であった。17日は、1945年のソ連軍によるワルシャワ解放から57回目の記念日であった。プーチン大統領到着以前のポーランドは、新構築への期待と過去の清算問題から生じる懐疑とが入り混じった複雑な空気が漂っていた。

しかし、公式訪問日程が進行するにつれて、クワシニエフスキ大統領（Aleksander Kwasniewski, 1954-）をはじめとするポーランド主要人とプーチン大統領との関係は急激に接近した。この2日間で実務レベルにおける具体的な決定はなされなかったが、総括的にはこの機会をポーランド・ロシア関係の転換点と言うにはまだ早すぎるものの、少なくとも新関係構築の出発点となったという評価は定着しつつある。

両国間には、カチンの森事件やシベリア強制労働などソ連時代にポーランド国民にふりかかった悲劇の真相究明や被害者に対する賠償や謝罪問題といった多くの課題が残っている。

プーチン大統領は、2000年4月12日、大統領就任前にクワシニエフスキ大統領と電話会談し、カチンの森事件の合同調査を提案し合意した。さらに、プーチン大統領は過去の清算問題に対する姿勢は積極的かつ建設的であり、スターリン政権の歴史に対して目をつぶる気はないという内容の発言をした。ロシア側から自発的に問題解決に取り組む姿勢を提示したのだった。そして、発言だけではなく、ワルシャワを訪問の際にポーランド地下政府及び国民軍兵慰霊碑に、ポズナンにおいてもポーランド地下政府記念碑及びポズナン暴動記念碑を訪れて花束を捧げた。これはプーチン大統領の意思により急遽実現したものであった。これら一連の行動は、両国がパートナーとして過去の苦い歴史を共に克服していくための精神的準備がようやく整ったことを示している。

ポーランド、ソ連、ドイツそれぞれは文化や国民性、歴史的、文化的背景に違いがある。各国互いに

自分とは異なるものを排除しようとした動きがあるゆえに、カチンの森事件を含む悲劇が第二次世界大戦中に起きたのである。この違いをお互いに認め合うことができたならば、これらの悲劇は起こらずに済んだであろう。違いに対して不信感や偏見があったからこそ生じたのだと思う。時代の流れによって、今まで封印されてきたものが明らかになり、各国の関係も良い方向に向かっているとと言える。これは、過去を見つめ直し、互いの国家としての、民族としての相違点を認識し、共に絶対的な真実を主張しないというような決意の表れではなかろうか。これから将来に向けて、各国間のわだかまりをなくし、新しい関係を築いていくことを期待する。

【参考文献】

[書籍]

- ・ D.F.フレミング [1966]. 『現代国際政治史 I』 岩波書店。
- ・ 伊東孝之 [1988]. 『ポーランド現代史』 山川出版社。
- ・ 成瀬治・黒川康・伊東孝之 [1987]. 『ドイツ現代史』 山川出版社。
- ・ 倉持俊一 [1980]. 『ソ連現代史 I』 山川出版社。
- ・ スタニスワフ・ミコワイチク [2001]. 『奪われた祖国ポーランド ミコワイチク回顧録』 中央公論新社。
- ・ 本間精一 [1998]. 『ポーランド未だ滅びず』 東洋出版。
- ・ 渡辺克義 [1991]. 『カチンの森とワルシャワ蜂起』 岩波書店。
- ・ 山本俊朗・井内敏夫 [1980]. 『ポーランド民族の歴史』 三省堂。
- ・ 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編 [1998]. 『世界各国史20 ポーランド・ウクライナ・バルト史』 山川出版社。
- ・ 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編 [1997]. 『世界歴史体系 ドイツ史3 —1980 年~現在—』 山川出版社。
- ・ 伊東孝之・直野敦・萩原直・南塚信吾監修 [1993]. 『東欧を知る事典』 平凡社。

[雑誌]

- ・ 『世界週報』 [1989], 1989年3月21日号。
- ・ 『外交フォーラム』 [1997a], 1997年9月号。
- ・ 『外交フォーラム』 [1997b], 1997年10月号。

[インターネット]

- ・ 『ポーランドニュースレター・ワイド版』 [2002], 2002年1月21日号
<http://www.e.okayama-u.ac.jp/~taguchi/wadai/plnw/plnw020121.htm>

[新聞]

- ・ 『朝日新聞』(夕刊)、[1998]、1998年7月15日付、「ポーランドの自主性尊重 ソ連書記長と共同声明」。
- ・ 『朝日新聞』(朝刊)、[1988]、1988年7月21日付、「ソ連書記長の置き土産(透視鏡)」。
- ・ 『朝日新聞』(朝刊)、[1990]、1990年4月14日付、「カチンの虐殺、ソ連がポーランド大統領に謝罪 ゴ大統領の、哀悼の意」。

- 『朝日新聞』(朝刊)、[1995]、1995年6月5日付、「カチンの森で虐殺犠牲者追悼 ポーランド政府主催(地球24時)」。
- 『朝日新聞』(朝刊)、[1999]、1999年4月16日付、「歴史への謝罪(声)」。
- 『朝日新聞』(朝刊)、[1999]、1999年4月18日付、「勇気ある告白 負の遺産公開(声)」。
- 『朝日新聞』(朝刊)、[2002]、2002年1月19日付、「『過去』清算に課題を残す ロシア大統領のポーランド訪問」。

(巻末資料 省略)